

談

1988-7



橋爪 大三郎

はしづめ だいさぶろう 1948年生まれ。社会学者。無所属。東大大学院社会学研究科修了。そのころから既存の学説にあきたらず、「言語」派社会学の樹立を志す。言語／性／権力を三つの説明原理とする新しい社会理論、「記号空間論」の構想を展開中。著書に「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」（どちらも勁草書房）「はじめての構造主義」（講談社現代新書）「冒険としての社会科学」（毎日新聞社・近刊）がある。

ポスト産業化社会のキーワード

『ホモ・リフレクト』

対



今田 高俊

新人類が新しい社会システムをつくる？

橋爪 今田さんの理論の重要なキーワードの一つに、ホモ・リフレクト(自省人)があるでしょう？

僕イメージを言うよね、ま、コントロールが中心になる管理社会がある。その中の人間像はちっとも面白くないし、自由な発想も出てこない。これじゃ自分も、社会も日本もどうしようもない——という非常な思いを込めた人間像が、このネーミングであり、フィードバックに表われている。こう見ていいでしょうね。

今田 今、「ゆらぎ」とか「カオス」という言葉が流行っているでしょう。なぜかという、昔のようなやり方ではうまく人間を見ることができなくなっているからなんです。でも、今の社会では、そういう見方が残っていて、そういう観点から見ると人々の動きがズレて見えるわけなんです。でも、それを逸脱とは言わないでしょう。高度成長期には「あいつは逸脱してる」と言ったんですよ。しかし、最近産業社会の基盤の方がガタガタしてぐらついているから、そうは言えなくなっちゃった。そこで、「ゆらぎ」とか「カオス」といった表現になる。そういう状況下の人間像を位置づけるために、「ホモ・リ

フレクト」というのを出したんです。

昔、団塊の世代が大学生だった頃は、管理システムがかなりきっちりしていたわけでしょう。要するに、従わせるべき標準的なモデルがあった。だからこそ団塊の世代はそれじゃいけない、と異議申し立てをした。しかし、挫折したわけですね。ただし、その状況のもとでのインパクトはあったと思う。そしてだんだん豊かさが達成されて、今、一五年ぐらいの差を隔てて新人類というのが出てきた。ところが、この世代の特徴は異議申し立てという感じではなくて、俗に言う「戯れ」——戯れたってアノチを叫ぶわけじゃないから、逃走になるわけ



彼らの考えていることをもう少し詰めていけば、新しい発想に基づいた社会をつくり上げるぐらいのものが出てくるんじゃないかなという感じはしているんです。

橋爪 昔「参加」ってありましたよね。個々人が自分の価値意識や主体性を持って、組織や社会に加わってその一部になるんだけど、主体性もなくさないし、全体の目標も達成されるっていう。そううまくいくものかな。

ここでいう新しい社会システムは、それとちよつと違うと思うんです。今でも新人類の感性はいろいろと重宝されて、広告とか、ファッションとか、消費産業では充分活かっているわけですが、そういうのともちよつと違う。新人類は新人類の感性、持ち味みたいなものを持ったまま、それに適合するように社会システムの側も変わっていく、というか、両方から歩み寄

る——そういうイメージを今田さんは出されているんじゃないか、と思うんです。

今田 そうですね。これまでの人間像というのは、要するに人間は意識的、合理的に「社会」というものをつくって、かつ変えられるという発想でできたわけです。それは一八世紀に市民社会、近代社会が出来上がる時の理念だったわけです。そして、平等も自由もかなり実現したところ、これまでの経験ではそう単純にいかなくなりました。そうじゃない人間の営みだってあるでしょ、という感じになってきた。一つはみんなが自然発生的にいろんなことをやりながら、それが協調して新しいパターンとか秩序をつくるという考え方が出てきた。これは新しい保守主義ですね。慣習的、にみんなやっているけれども、その中から何か新しいものが立ちあがってくる。もう一つ、僕が考えている自己組織というのは、そういう自然発生的な面もあるけれど、それ以上に自覚的、意識的に制御できない別のものが人間にはあるということなんです。

人間というのは、日常生活の中で八割くらいは普通のパターンに従って慣習的にやっているんですよ。あとの一五%くらいが目的を立てて計画して、意識的にやっている。あとの五%くらいがリフレキシブにやっている。こう思っているんですよ。それぐらいはやらない

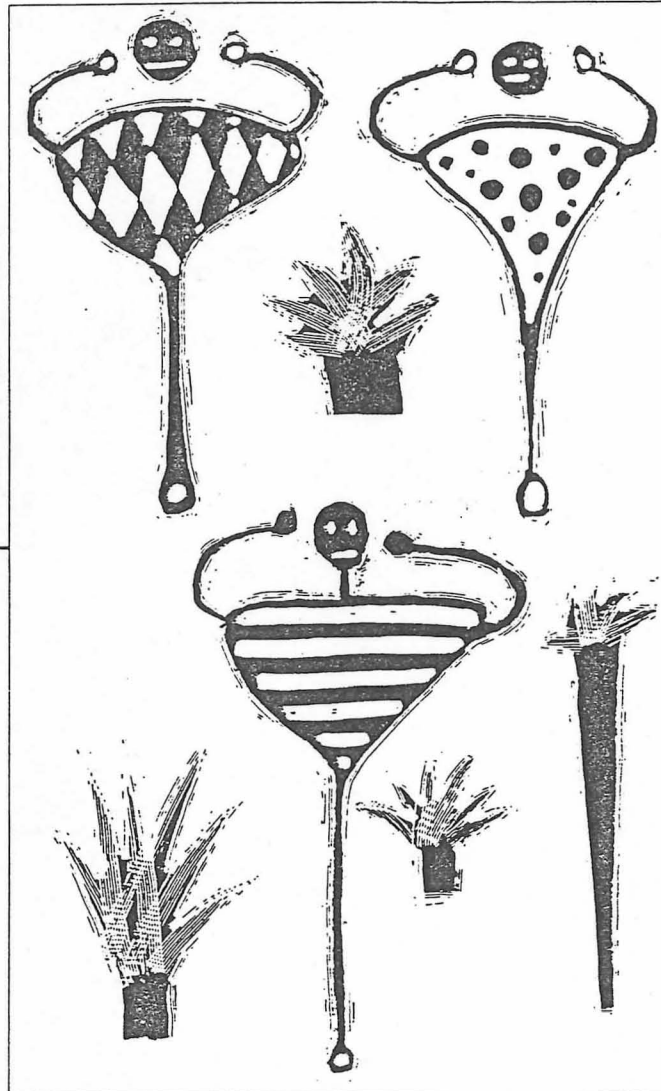
と窮屈でやられてられないから。ところがこの三つを別々に分けて、意識的、計画的にやることこそが大事だ、なんて言ってきたのが近代、特に戦後の高度成長社会。そこに反省がきて、片一方は自然発生的にみんながやっているうちにできる、もう一方はリフレクトして新しい違いというものをつくって、それを今までの慣習的なものの中に嵌め込んでいく、といった感じです。その辺が全部うまくつながってはいじめて、ひとつの自己組織、リフレクト社会ができるのではないかなあ、と思うんですよ。

「ホモ・リフレクト」とは——

橋爪 最初「モダンの脱構築」を読んでね、ホモ・リフレクトってどういう人間像か気になるわけですよ。コントロール社会におけるモダンの古いタイプの人間像ではない。その正反対、というのは分かる。じゃ、どういう発想をして、どういう行動をすればホモ・リフレクトになる(なれる)のか、はつきりわからなかった。しかし、よく読んでみると、自分の外側になにか新しい人間像のモデルかデザインでもあって、それに自分を合わせて、ホモ・リフレクト人間になりました、なりませんでした、という話じゃない、ということが分かった。

これ、ある種、人間に対する信頼みたいなも

新人類といわれる人たちは、感性として非常に良いものを持っている。しかし、この感性の良さは、今のところ個人でバラバラになっている。これを社会的にどうつなげていくかが問題だ。



です。しかし、管理のメカニズムに乗らないとか乗りたくないという大袈裟なことじゃない。かつての世代が巨大だと感じていた機構自身が少しゆらいでいるから、いくらでも逃げられる。それだけの下支えもあるし生活水準もかなり上がっている。その意味では、管理機構にとって、この方がきついですよ。要するに、何かをやるうと思っても肩透かしを食うから。

ところが片方で高度情報化という新しい管理システムが、かつての管理システムとは違った

形で進んできた。新人類的な発想が悪いというのではなく、彼ら自身も自分が関心の持てるものや付加価値の高いものに対しては、結構打ち込むだけの素質は持っているんですよ。しかし、世間では感覚的過ぎるとか、小さな差異しか認めないとか言って彼らを陳腐化している。陳腐化しても構わないんだけど、そこから新しいものは何も生まれてこない。むしろ、そういう中に新しい社会の兆しを読み取るべきだと僕は思うんですよ。ただ、放っておけば高度情報

化のネットワークの中に取り込まれて、また別の管理社会になってしまう。

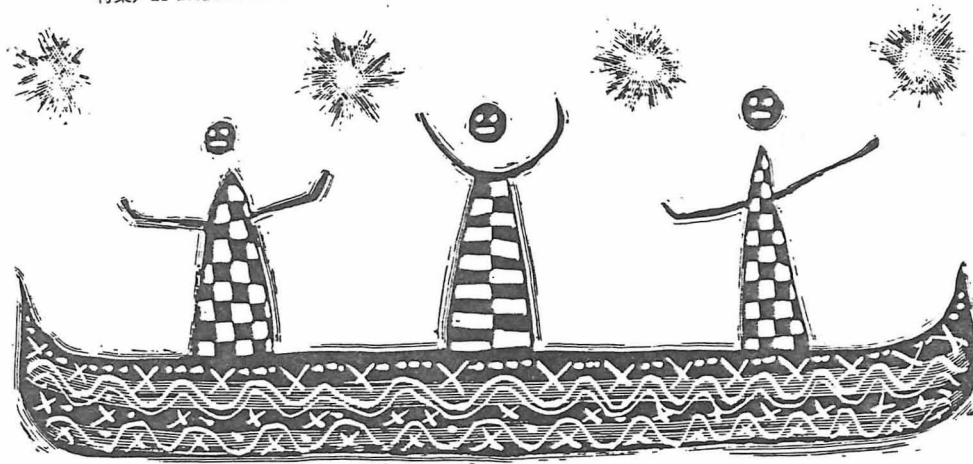
そこで、リフレクションが必要になるわけで、逃げる前にリフレクトし、自己組織をして——そういうイメージを「ホモ・リフレクト」という言葉に籠めているんです。

橋爪 僕も、「新人類叩き」に、さらさら加わろうなんて思わないです。

彼ら、感性として非常にいい線が出てきていると思うんだけど、我々団塊の世代から見ると少し心配なのは、一人一人の感性みたいなものが、社会的な広がりとして、どうつながっていくのだろうかということ。つまり、日本なら日本、世界なら世界というシステムの中にプラスの面として、どう位置づけられていくのだろうか、あるいは自分を位置づけていくのかということ、ろが、心配なわけ。

それは我々が解答を与えなければいけない立場にあると思うんですが、そのいみで「リフレクト」という考え方が、生活世界から意味世界への連続性を主題としているところは、非常によくわかるように思います。

今田 そうなんです。本当は生活世界と社会システムというのは、分立したものじゃいけないと僕は思っています。二つがリンクする回路が必要なんだけれども、今の段階ではその回路を新人類が意識しているとは思えない。しかし、



「意味」というのは目標を持たない。終わりがないのである。目標を達成することに価値があるのではなく、その行為をすること自体に価値があるのだ。

理的発想で見ると、こいつ何を最終的にやりた
いのか、無目的にやっているみたいだけど、
と映るんですが、それはいわゆる管理人間の目
標達成というスタイルではないからですね。そ

橋爪 ホモ・リフレクトというのは、つまり人
間のことである。ホモ・エコノミクスという
ある時代・ある地域に現れた、制度としての人
間のあり方だったでしょう。そういうものでは
ないのだと。ホモ・エコノミクスの時代が終
わり、これからはホモ・リフレクトの時代とい

今田 その通りですね。僕は、ホモ・リフレ
クトというのは古典古代からあったと思ってい
る。だから、ホモ・リフレクトの定義とは何か、
というふうな近代発想で問うこと自身が、
一つの限界をもっていると思う。すべてを定義
して、すべてを割り切って合理的に考えるとい
う発想そのものに納まりきらない側面、かつ
人間にとって有能なところってあるわけだ。
そこからはみ出したところで。僕は、リフレ
クションする能力それ自体が人間の条件そのも
のだと思っている。

のじゃないですかね。人間はコントロールしな
くても、ひとりで言葉も喋るようになるし、
日常生活にも差し支えないし、元々ちゃんとや
っているものなんだ。それをただか効率の
論理からコントロールし過ぎていた。その大き
な反省がいま、社会の側にあるんじゃないか。
だから、人間の本来の持ち味や感覚的な部分
を自分で見つめ直していけば、誰でもホモ・
リフレクトなんですよ、というふう書いて
ある。

「豊かさ」と「意味」をどうつなぐか

今田 まさに、その通りです。
のではなくて、元々ホモ・リフレクトだったの
で、そのことに今、気づかなきゃいけない時代
になってきたということなんです。

橋爪 今、一つに豊かさの問題があつて、我々
が達成した豊かさは基本的によいもので、後戻
りできないし手放せない。これは大多数の意
思一致だと思う。もう一つ、今度大きく出てき
たのは、一人一人の人間の生活世界の意味、生
きる意味、社会に参加する意味、そういう個々
の人間の「意味」みたいなもので、それらはっ
きり自分の手で握っておきたい。日本人は今、
欲張っているの両方欲しいわけですね。しか
し、豊かさを実現しようと思うとどうしても効
率が必要になる。効率を実現しようとしてもど
うしても管理になる。管理になればどうしても
意味という問題がないがしろにされてしまう。
これが今までの問題で、そこをどう突破して両
方手に入れようか。今田さんは、そういう、今、
みんなが頭を悩ましている問題に対して一つの
アイデアを出してきている。

今田 その通りで、この十数年、石油危機以後
揺れたのは、意味の問題が出てきたからです。

の「無い」というのは、やはり意味を求めてい
る動きなんだろうという気がする。そういう
受け皿を社会はちゃんとつくっていかないと、
折角出てきた新しい動きに対して抑圧装置にな
ってしまうのではないかと。

橋爪 効率とか合理性はどういう組立てになっ
ているかという、必ず何か前提があるんです
ね。この材料で、こういう制約の中でやりなさ
い、みたいな。で、与えられた目標を達成する
のには、この材料をこういう具合に組み合わせ
たら一番うまくいく、というふうな考えていく
のが合理性だと思ふんです。これはあるいみで、
乏しい社会の乏しい発想である。目標も選べな
いから、発想に制限がありますしね。

その対極が、意味の世界です。意味の世界に
は、目標もない。前提もあるようでない。何が
前提になるかを、いつも定義し直し、選りなおし
ていかなければいけない。目標もあれになっ
たり、これになったりする。

人間の生き方を考え直してみると、最後は確
かに死んでしまうわけで、どうも究極の目標が
そなわっているとは言えないみたいだ。あると
しても自分で考えるしかない。その点からい
くと、生きる意味、生活世界のリアリティに一番
近いのは、効率の論理ではなくて、意味の論理
ですよ。これは本来、効率と非常に接合が悪
いはずなんだけれども、なんとか今まで、だま



人間あるいは社会にとって、意味とは何か。今
までは機能とか効率ばかり言ってきたけれど
も、意味の問題が自己主張しだして、これはも
う止まらない。しかも、どういうふうな「意味」
を人間に取り込み、社会に取り込むかという
ところでなかなか難しい。

一つ最大の問題は、意味というのは目標達成
で求めるものじゃないってことです。意味って
終わりが無いものなんです。また、従来の社
会参加というのとも違うんです。意味ではなく
て、創ることへの参加にしか意味の充実はない
から、これは今までのエンディングがあると思
っていた発想とは全然違う。その違う発想を表
すのに差異化の運動体という感じになって、そ
れが何となく新人類にも現れている。だから管

し、だましやってきました。

今田 効率を追求することによって効率は自壊
してしまふ、と僕は思う。だから、高度情報化
が進むことは悪くないと思っている。高度情報
化が進み、かつ効率化が進むと、要するに付加
価値がないとダメになるということではないか
と思っているわけです。今までのように、物を
つくるのであれば安く大量につくればいいん
だけ、情報化は進めば進むほど価値は素材価値
ではなく付加価値にしか存在しえなくなってい
く。知識社会というのもそうですね。だから付
加価値をつくるしかない。付加価値というのは
目標を決めてつくれるものじゃないんですよ。
何が付加価値であるかを探索しなきゃいけ
ない。その行為は、恐らく生活世界の意味の追
求と、きつとどこかでいつか収斂していくと思
う。

橋爪 七〇年代から、環境派、自然派、エコロ
ジー派と、いろいろ出てきましたね。今田さん
は、それは分かるけれどどれにも乗らないよ、
ということだと思ふ。僕も、わかる部分はある
けれど、袋小路だという感じがして入ってい
けない。だけど、豊かさの意味をどうつなぐ
かというのは、まだまだ未解決の問題で、もっ
といるんなら発想があつていいと思う。今田さん
のこれからの研究にも大いに期待しています。